

ヒト・カネ・シゼンの循環を促す
「地域共助コミュニティ」形成(島根県海士町)

地域のウェルビーイングを 共創する 地球コクリ!

植物と動物と自然と地球と人は、つながっている。私たちがそのつながりを思い出すことが
地球中心社会を創る第一歩になる。じゃらんリサーチセンターのそうした取り組みの1つを紹介する。



地球や地域のウェルビーイングが
個人の幸福にもつながる

「ウェルビーイング」。最近よく耳にするのではないだろうか。「幸福」や「社会的・経済的・環境的に良い状態」と訳される言葉である。

ウェルビーイングと聞くと、個人の幸福をイメージする人が多いだろう。しかし、実は「地球や社会や地域や企業のウェルビーイング」もある。地球や社会や地域や企業が、良い状態であれば、所属する人たちも良い状態になりやすい。地球・社会・地域・企業のウェルビーイングは、個人のウェルビーイングの実現にもつながるのだ。

最近、地球や地域のウェルビーイン

グが特に注目されている。たとえば、環境省は2024年から始まった「第六次環境基本計画」で、現在及び将来の国民一人一人の生活の質、幸福度、ウェルビーイング、経済厚生の上昇のために「循環共生型社会(自然と共生する持続可能な経済社会システム)」の実現をビジョンに掲げている。

ごく簡単に言えば、環境省は「自然

と人間が共生する循環共生型社会を実現すれば、地球や地域のウェルビーイングが高まり、そこに住む個人の幸福度も高まる」と言っているのである。

**「コクリ」の最新バージョン
「地球コクリ」!」始動**

じゃらんリサーチセンター(以下JRC)は2020年から、「地球コク

リ!」を推進している。2011年に始めたコクリ!の最新バージョンである。いくつかのプロジェクトを並行的に進めているが、その1つが「地域のウェルビーイングを共創するプロジェクト」だ。具体的には、島根県海士町で「ヒト・カネ・シゼンの循環を促す地域共助コミュニティ形成」を行った。その内容を詳しく紹介する。

心を動かす、
日本を元気にする
観光・レジャーのプロデューサー
応援情報誌

とーりまかし

vol. 80
2025年6月号

目次

- 24 **AI時代の感性を探る**
AIネイティブ、タイパ、好きの模索
10年後の旅人
- 16 **生成AIで回す!
観光戦略の「新・循環」**
「生成AI活用による持続可能な
インバウンド観光研究」より
市場分析工数が1/15に!?
- 2 **地球コクリ!**
ヒト・カネ・シゼンの循環を促す
「地域共助コミュニティ」形成(島根県海士町)
地域のウェルビーイングを共創する
- 28 **海外の動向から学ぼう!
DMOの世界**
持続可能な「DMO経営」学 ver.2.0
世界の先進事例に迫る!
DMO最前線 第1回
連載
- 32 **マエストロの肖像**
BAC代表/ブックディレクター
幅 允孝
- 34 **はつさくシャーパーベット**(広島県)
Nostalgic but Innovative
ちょっと気になるおみやげ手帖

とーりまかし [torimacashi]
インドネシア語で「ありがとう」の意。
日頃からお世話になっているクライアントのみならず、読者のみなさまにありがとう、そして私たちに知恵を提供してくれるすべてのみなさまにありがとう、という感謝の気持ちを込めて、この名前をつけました。ちなみに、じゃらん「Jan」もインドネシア語で、「道」「プロセス」の意味です。「Jan Jan」で、「散歩する」「フアラ出かける」「旅行する」などの意味になります。



地球コクリ!
earth co-cree!

とは何か

人間が他のいのちと共創する社会を どうしたら創れるのか

地球コクリ!は、2011年に始まったコクリ!の最新バージョンだ。全てのいのちがいかされあった地球社会をみんなでつくり、「人間中心」から「地球中心」へのシフトを促す研究・社会運動である。今回の実証事例は、地球コクリ!のプロジェクトの1つである。

「地球コクリ!が目指すのは「地球中心社会」

地球コクリ!は、一言で言えば、地球中心・生態系全体のコ・クリエーション研究コミュニティである。「循環共生型社会とウェルビーイングを共創するための研究コミュニティ」と言い換えてもよいだろう。「行き過ぎてしまった人間中心社会から地球中心社会へのシフト」を促すことを大きな目的の1つに据えている。

地球コクリ!では、どうしたら人間が他のいのち(植物・動物・鉱物・自然・地球など)と共創する社会を創ることができているのかを探究している。人間と地球生態系のつながりを取り戻し、全てのいのちがいかされあい、調和し、共創する「地球中心社会」をつくりたいと考えているのである。

その想いは、世界中の映画祭で12の賞を受賞した地球コクリ!の短編アニメ映画「Re-member」に詰まっている。また、より詳しい情報は、地

球コクリ!サイトに掲載している。

地球コクリ!の代表的な取り組みの1つが、今回紹介する事例である。他にも「日本の精神性を巡る旅」(15ページ)や「奈良コクリ!」「地球コクリ!アート」など、さまざまなプロジェクトを現在並行して進めている。

「地域のOS」を変容させれば地域はごろっと変わる

地球コクリ!では、「私たち人間が、今、本当に力を発揮すべきことは、なんだろう?」「私たち人間が、地球上のあらゆる生命体と共創するために大切なことは、なんだろう?」という問いのもと、多様な実証研究を行っている。最も重視することの1つが、一人ひとりの「意識・価値観の変容」とコミュニティの「関係性の変容」である。また、めていえば、「OSの変容」だ。皆が「感じる知性を取り戻す」「地球の仲間だったことを思い出す」「地球にいかさされていると感じる」といった意識・価値観に変わることを目指している。

今回のような地域変容の事例で言えば、地域の皆さん(特にコアチーム)の意識と価値観を変え、地域内の人間関係を変えることで、地域の皆さんが自らまちを変える「うねり」を創るのが、地球コクリ!の方法である。

地域外の専門家などが、どれだけ優れた地域改革のアイデアを用意しても、そこに地元住民の想いが反映されていなければ、「絵に描いた餅」になってしまう、なかなか形にならない。たとえ



地球コクリ!サイト



地球コクリ!短編アニメ映画「Re-member」ヒトが地球の仲間だったことを、思い出す物語



実証実験

島根県海士町のヒト・カネ・シゼンの循環を促す「里山里海ぐるぐる会議」

2022年から、地球コクリ!は島根県海士町でヒト・カネ・シゼンの地域内循環を促す「地域共創コミュニティ」形成の実証実験を行った。彼らのOSの根本の変容をストーリー形式で紹介する。

第0章 海士町とは

島根県海士町は、隠岐諸島の1つ、中ノ島の自治体の名前である。海士町は、地元の高校・隠岐島前高校に全国から生徒を受け入れる「島留学」や、海産物を新鮮なままに全国へ届ける「CAS凍結システム」など、地域創生に関する先進的な取り組みをいくつも進めていることで有名なまちだ。

大江和彦町長は、施政方針で「ひとの還流」暮らしの環境「里山・里海の循環」の3つの「かん」を掲げている。こ



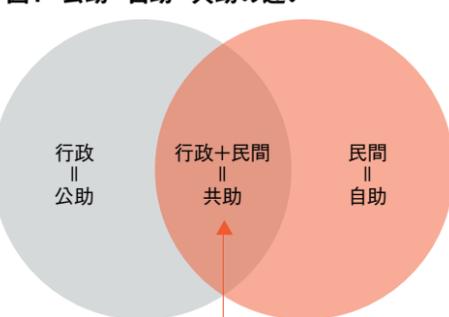
島根県海士町

のうち「里山・里海の循環」では、海と山の循環をより豊かにするため、これまで活かしきれなかった地域資源・自然資本にも着目し、「ないものはない」の精神で環境負荷の低い再生可能エネルギーの普及促進を図り、脱炭素の取り組みを積極的に行うことを打ち出している。この里山・里海の循環という考え方は、まさに循環共生型社会や地球中心社会に通じるもので、地球コクリ!と親和性が高いと考えている。今回の里山里海ぐるぐる会議は、こうした海士町の施政方針のもとで始まった地域共創コミュニティである。

第1章 島の低炭素化を目指す「地域共創」コミュニティ開始

「里山里海ぐるぐる会議(以下、ぐるぐる会議)」の始まりは、2022年に遡る。コアチームは、海士町役場のけいすけさん(大野佳祐さん)／里山里海循環特命担当課長・当時)とゆういちろうさん(渡辺祐一郎さん)／里山里海循環特命担当課主査・当時)だ。

図1 公助・自助・共助の違い



地域の「公正な移行」は行政と民間が力を合わせて実現する必要がある

彼らがぐるぐる会議を始めた目的は「島の低炭素化」である。大江町長の施政方針のもと、2人は島の再生可能エネルギーを普及促進したり、EV化を進めたりして、里山里海の循環を推進したいと考えていた。そのために公助(行政だけ)でも自助(民間だけ)でもなく、「共助(行政+民間)」のコミュニティを立ち上げたのだ(図1)。

なぜ共助コミュニティかといえば、最大の理由は「公正な移行」のためである。公正な移行とは、誰一人取り残さずに低炭素化を実現することだ。た

とえば、ある地域が自動車のEV化を進めれば、当然ガソリンスタンドの経営は圧迫される。このとき、地域がガソリンスタンドと共存しながらEV化を推進するのが、公正な移行である。そのためには、行政、EV導入を推進する会社、ガソリンスタンドの三者が協力してEV化を進める必要がある。低炭素化を進めようとすると、他のビジネス領域でも必ず同様の壁にぶつかる。低炭素化は、良くも悪くも地域社会や地域経済の形を変える取り組みなのだ。だからこそ、行政と民間が力を合わせる「地域共創コミュニティ」が欠かせないのである。

なお、けいすけさんは、町役場で働く一方で、海士町で自然エネルギー導入支援事業や地域の未利用資源活用支援事業を手がける交流株式会社と、魅力的で持続可能な海士町の実現に貢献するAMAホールディングス株式会社の代表取締役も務めている。けいすけさん自身が、役場と民間の両方の立場に立っている。

※1 OSとはオペレーティングシステムの略で、コンピュータやスマートフォンなどを動作させるための基本ソフトウェアのことを指す。地球コクリ!では、人の意識・価値観・関係性を、仕事や活動や生活をする上でのOSと捉えている。

第2章 普段は出てこないメンバーをあえて集めた

地域共助コミュニティには、多様な民間メンバーが必要だ。今回のぐるぐる会議には、以下の基準でコアチーム2人も含め13人を集めた。

①地域のキープレイヤーで、本人が変化したときの影響力が大きい「レバレッジになる人」を選んだ。

②農業・漁業・畜産業・林業・ガソリンスタンド経営・観光・環境・福祉・起業家・主婦など、「多様な職業や立場」のメンバーを選んだ。

③男性と女性、地元で生まれ育った人と移住者が、いずれも「だいたい半分ずつ」になるように選んだ。

④多様な意見・情報を集めて地域の総意に近づけるため「行政にあまり好意的でない人」もあえて選んだ。



図2 ぐるぐる会議のチーム構成



⑤以上のバランスを意図的に作り上げるため、「あえて公募せず」にコアチームがメンバーを選定した。

その結果、ぐるぐる会議のメンバーは、地元有力企業の社長や自治会長のような役場主催の会議の常連メンバーではなく、次世代リーダー層や、今後ではなく、まちのキーパーソンなど、役場が主催する会議にはまず出てこない人たちがばかりが選ばれた(図2)。

たとえば、みきやさん(元吉実希也さん/元吉燃料)はその1人である。しかしみきやさんは、ガソリンスタンド会社の代表者として、島の公正な移行に欠かせない人物でもある。このような「島の変容の起点となる可能性を秘めたメンバー」が一堂に会したのである。メンバーの1人・さわこさん(石原紗和子さん/AMAホールディングス取締役)は、「まさか、こんなメンバ

ーが集まる会議とは思っていませんでした。最初は何か始まるのかとドキドキしたのを覚えています」と語った。

第3章 民間メンバーがテーマを決めて実行する側に回った

2022年、13人のメンバーでぐるぐる会議が始まった。

ぐるぐる会議の大きな特徴の1つは「行政が意思決定をリードする一般的な行政主体の会議のあり方を止めた」ことにある。反対に、民間メンバーのほうが決める。具体的な打ち手を実行する側に回るような場にしたのである。

その際、町役場のけいすけさんとゆいちろうさんは、自ら意思決定するのではなく、「関係性重視のマネジメント」でメンバー主体を引き出すファシリテーターの役割を担った。さらに会議を定期的な事前計画に沿って開催するのではなく、誰かが必要だと感じたときに随時開催することにした(表1)。

第4章 地球コクリ!が意識と関係性の変容を支援した

地球コクリ!は、「島とつながる地球コクリ!ワーク」をはじめ、ぐるぐる会議メンバーの意識・関係性の変容をさまざまな面から支援した(詳細は左ページコラム)。

島とつながる地球コクリ!ワーク

ぐるぐる会議において、地球コクリ!は、会議全体のデザイン、場づくりのファシリテーション、コアチームのコーチング伴走支援などを通じて、意識・関係性の変容を支援する役割を担った。地球コクリ!の研究



究パートナー・ひろしさん(山田 博さん)とJRC研究員・三田が関わった。

地球コクリ!では、地域を支援する際に「地域古来の聖地」を重視している。どの地域にも、昔の人々が大事にしてきた場所がある。山や森や水の要素に祠があり、祈られ、掃除がされ、大切にされてきた。しかし、そうした場所は忘れられていることも少なくない。地球コクリ!では、さまざまな人に聞いたり、神社や祠などの目印を辿ったりして探し出し、その場所で折った後に、土地や自然とつながるワークをすることが多い。人間の感性をひらき、地域や地球の声を傾けることができるからだ。

今回の事例では、ある山の頂上にある奥の院を発見した。そこでみんなで山頂に行き、島の全体像を感じながら、いくつかの

ワークを実施したのだ。

「里山里海の循環を感じるワーク」では、山の頂上から島の自然を見渡しながら、島の地下水がどのように流れているか、また雨になって山に降るまでどのような循環をしているか、コンクリートがその循環をいかんにかせぎ止めているか、現在の土地がどのような状態にあるかを感じてもらった。

また「五感を開くワーク」では、山の頂上で自然の音を澄ませたり、裸足になって土を感じたりしてもらった。さらに、地球コクリ!の対話の場では円座になることが多いのだが、あるときには屋外でたき火を囲みながら円座になった。

「こうしたワークにどのような効果があるのか?」と疑問に思う人が多いかもしれないが、後述するように、この2つのワークや、その後のコーチングの伴走支援を経て、けいすけさんやゆいちろうさんの意識は明らかに変化している。これらのワークには明確な効果がある。



山頂から見ると、いかに海・山・川・里・田がつながっているかわかる。1つが汚れると、他も汚れていくことが容易に想像できる



島の全体像を感じられる山の上の「聖地」。氏神様の奥の院があり、近くの集落の人は年に2回訪れるが、あとの9割が初めて訪れた。島であっても、多くの人が存在を知らない聖地があるものなのだ



私たちは、日常的にはいつも「ハードフォーカス(焦点を絞って凝視)」状態にある。「ソフトフォーカス(ぼんやり全体を眺める)」にすると、広く多くのことを受け止められる



耳を澄ますと、これまで聴こえてこなかった音が聴こえてくる。海の声、鳥の声、風の声。葉っぱが落ちる音が聴こえたという人もいた



裸足になると、大地に直接触れ、体内に滞留した電気が放電される(アーシング)。素肌で自然を感じる



コンクリートで固めると、山からすれば、口と鼻を塞がれて息ができなくなったと同じようなもの。ときにはコンクリートで固めたことが原因で土砂崩れが起こることもある



「ぐるぐる会議」の様子。円座になり、ときにはたき火をしながら、関係性を深めていく

※2 山田 博氏 地球コクリ!研究パートナー 株式会社森へ創業者/プロ・コーチ/山伏/武蔵野大学ウェルビーイング学部教授

他にも自分は気づいていない大切なことがあるのかも、しれない、とも思うようになりました。

その後、けいすけさんはひろしさんのアドバイスに従って、1日1回、家の近所の海辺に裸足で立ち、五感を開いて、島の自然と循環を感じるワークを行った。「山の頂上でショックを受けてから1年半は、このワークをほぼ毎日行いました」。

ワークを繰り返すうちに、けいすけさんは目に見えて変わっていった。「五感を開き続けていたら、私はいつの間にか変わりました。たとえば、それ以前は会議では私ばかりが話し、ほとんどすべてを私が決めていました。あるとき、私が他の人の発言機会を奪っていたと気づき、発言を意識的に控えるようにしたら、他の人たちから新たな意見・アイデアが出るようになりました。また、部下を叱責することが劇的に減り、いろいろなことを部下に任せられるようにもなりました。さらに、自分が周囲に許容されている感覚を持つようになり、自分をよく見せようとせず、子どもの頃に近い感覚で人と関われるようになりました」。

先ほども登場したぐるぐる会議メンバーの1人・さわこさんは、AMAホ



けいすけさん (大野佳祐さん)

第5章 コアチーム・けいすけさんの変容が島を変えている

その結果、海士町にはいくつものプロジェクトが生まれ、さまざまな変化や変容が起きている。まず大きかったのが「コアチーム2人の変容」である。順に紹介していく。

けいすけさんは、山の頂上で行った「五感を開くワーク」で、耳を澄ませたときに波の音が聴こえなかったのだという。「ひろしさんに、波の音が聴こえますね」と言われ、まったく聴こえなかった自分に大きなショックを受けました。いかに自分は自然から切り離れて生きてきたのかと思いました。存在するのに聴こえない音があると知り、

表1 里山里海ぐるぐる会議の特徴

項目	一般的な行政主体の会議	里山里海ぐるぐる会議
実施場所	固定(会議室など)	流動的(ときに屋外で実施)
リーダーシップ	意思決定重視	関係性重視
メンバーの選び方	各組織長・有識者など	多様なキープレイヤー
事務局の役割	司会・進行	ファシリテーター
外部支援者の役割	解決方法や専門知見を提供	参加者の変容を支援
テーマ	事務局が起案	参加者が主体的に設定
実施期間	期間が決まっている	期間を決めずに継続
実施時期	計画に沿って実施	必要に応じて随時実施
発言の種類	所属や専門性に準じた発言	人としての率直な質問や意見
成果物の方向性	大きな計画や方向性	具体的な打ち手と実行

印象がこのようにそれぞれ変わりました。

みきやさんも、あるメンバーと、以前は挨拶するくらいの関係性だったが、会議後は立ち話が始まると、30分くらい普通に話すようになったという。一般的に、地域では新たな人間関係を増やしていく。また、周囲の人々の新たな一面を発見するようなことも起きにくい。ぐるぐるの会議のように、地域内に新たな人間関係を構築し、一緒に話して合う場合は貴重なのだ。

いま名前が出た漁師で漁労長のおおくぼさん(大窪諒慈さん)／飯古建設設置網事業部)はこう語ってくれた。

「いままで、私は有機農業のゆめの字も知りませんでした。島の他業種の知識がいろいろと増えました。反対に漁師仲間では常識となっていたことを、

まちの人たちが知らないこともわかりました。ぐるぐるの会議を経て、自分たちの知識をもっと周囲に伝えていこうと思うようになりました。

私にとってぐるぐるの会議は、自分のやりたいことを実現するために、前提が違う人をどのように巻き込めばよいかを学ぶ成功体験になりました。資料を作ったり、説明したりする能力が明らかに高まりました。

第8章 関係性が変わったら 物事が次々に動き出した

このように関係性が変わったら、物事が次々に動き出した。彼ら自身が主体的に行動を起こし始めたのだ。

1つ目に、けいすけさんの会社・交際では、行政や島内事業者にEVをリースで貸し出す「EV推進協議会」を推進している(図4)。みきやさんのガ

ソリンスタンド会社も共同で出資している。EVとガソリンスタンド会社の共存共栄を図っているのだ。

EVの島内人気は高く、2025年3月時点ですでに5台を導入しており、今後さらに増えるという。「EV化が進んでも、船やトラクターなどは変わらず石油を使います。ガソリンスタンド会社は今後も島に欠かせない存在なのです。一緒に低炭素化を進めていくことが大切です(けいすけさん)。

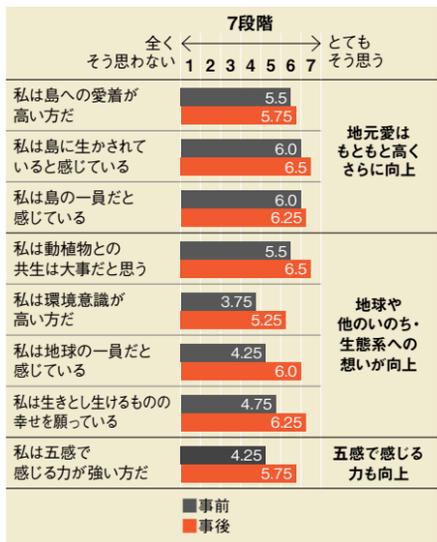
2つ目に、町役場と交際は、地元建設業者や地元有志とともに「伐採木炭化施策」を進めている。

いま低炭素化で注目されている技術の1つが、有機物を熱分解して炭にする「炭化装置」だ。普通に焼却炉で焼却すると、二酸化炭素を空气中に排出



みきやさん (元吉実希也さん)

図3 コアチームの変化



出所:じゃらんリサーチセンター「ヒト・カネ・シゼンの地域内循環を促す地域共創コミュニティ形成研究 振り返り調査」(n=4) (2024年)



図4 EV推進協議会の仕組み



指す場です。これから数十年にわたって、自分の子ども世代や孫世代も使う場所になるでしょう。そのとき、若い世代に海士町の歴史を継承する場にもしたいと思っ、リメイク家具を置きました。結果的に多くの住民の協力を得て、どこにでもあるようなスペースではなく、海士町らしい場所にすることができました。

4つ目に、おおくぼさんたちが中心となって「ぐるぐる行商人」という活動も行われた。

実は、日本には大量の「未利用魚」がある。特に、海士町のような離島の場合、本土なら普通に販売できるアジ、イワシ、サバなどの魚も、流通コストが高いために未利用魚となってしまう。この未利用魚を島内で販売できれば、無駄やゴミを減らすとともに、地域経済を潤すことができる。



海士町役場1階の未来共創スペース「しゃばりば」には、旧庁舎の備品をリメイクした家具が使われている



おおくぼさんは、十数年にわたって海士町の未利用魚の販路を作ろうとさまざまな努力をしてきたが、成功しなかった。おおくぼさんが、ぐるぐるの会議でその熱い想いと悩みを皆に打ち明けた結果、町役場が「ぐるぐる行商人」を派遣し、島内の商店や加工業者への流通・販路を開拓する試みが行われたのである。



おおくぼさん (大窪諒慈さん)

5つ目に、みきやさんはいま、ぐるぐるの会議で知り合ったメンバーと協力して、島の高齢者の生活を支援する取り組みを始めようとしている。

今後、日本は超高齢化社会に突入する。そのとき、高齢者支援や地域の助け合いなども、行政だけでなく、行政+民間の「共助」でやっていくことになるだろう。みきやさんの取り組みは、その先駆けになるかもしれない。

もちろん、ぐるぐるの会議のすべてが順調というわけではない。「ぐるぐるの会議によって、ネガティブな現状が明確になったり、一時的に対立が起きたりもしています。当然のことですが、チャレンジしたことによって、新たな問題も生じています。すべてがうまくいっているわけではありません。しかし、そうしたことも、長い目で見ればポジティブに変わっていくはずだ

してしまう。ところが、炭化装置で炭にすると、大気中の二酸化炭素を炭化固定でき、二酸化炭素をむしろ減らせるのだ。しかも、このバイオ炭を土壌に埋めると、J-クレジット制度を通して資金を得ることもできる。

海士町では、年間1000トンもの道路伐採木が出る。これまでゴミとして処理してきた道路伐採木を炭化装置で炭化固定して、地中に埋めれば、二酸化炭素排出量を大きく減らせる。そこで伐採木炭化施策を始めたのだ。

交際は、以前から炭化装置に着目していた。しかし、道路伐採木がこれほど大量にあり、ゴミとなっていたことは知らなかった。ぐるぐるの会議で炭化装置技術と大量の道路伐採木の情報がつながって、伐採木炭化施策を進めることになったのだ。離島はゴミ焼却炉を自前で持つほかになく、その能力に限界を抱えている。燃やすゴミを減らすことは、まちの運営上もメリットが大きい。いくつもの利益がある施策になっている。

3つ目に、さわこさんは、海士町役場・新庁舎1階の未来共創スペース「しゃばりば」の企画開発を担当した。さわこさんはその場所に、旧庁舎の家具や備品、建設会社の廃材や倒木な



さわこさん (石原紗和子さん)



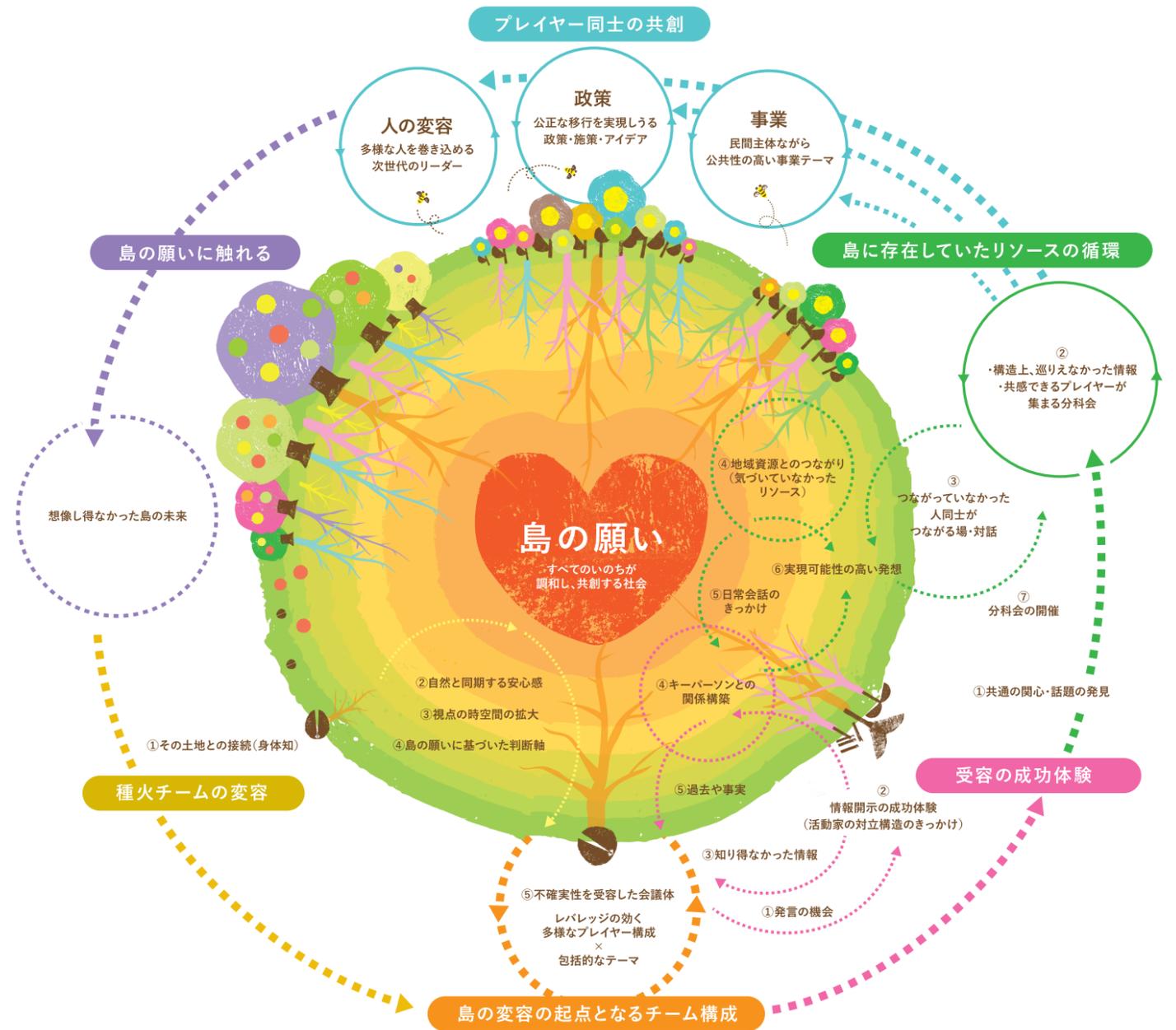
しゃばりばのリメイク家具は住民参加型ワークショップで製作した

(けいすけさん)。

ときには雨が降ったり、雷が落ちたりするのが自然だ。循環共生型社会や地球中心社会とは、自然や人間のネガティブな面ともうまく付き合いながら、地域や個人のウェルビーイングを高め、いく社会なのだろう。



図5 ぐるぐる共創モデル(ヒト・カネ・シゼンが循環する事業・政策創出モデル)



まとめ「ぐるぐる共創モデル」

この図は、今回の実証研究をもとに、次世代型のまちに移行するために必要なステップをまとめたものである。この図のスタートは、左下の「種火チームの変容」だ。地域のOS(意識と関係性)の変容は、種火チーム(今回でいえば、けいすけさんとゆういちろうさんのコアチーム)の結成と変容から始まる。次に「島の変容の起点となるチーム構成」を行う。普段は行政の会議に出てこない多様なメンバーを招集するのだ。招集されたメンバーは、ぐるぐるの会議で発言の機会を得て、各自の情報を開示し、地球ココリ!のワークなどを体験しながら関係構築をしていく。安心安全な場での本音の会話を何度か繰り返すと、彼らはそのうち受容されたと感じる。「受容の成功体験」を得るのだ。

ここまで進むと、各メンバーが主体的に動き出すようになる。つながっていなかった人同士がつながり、対話が起こる。日常的な偶然の出会いをきっかけに深い会話が始まることもある。そうやって情報が結びつくことで、たとえば「道路伐採木がこんなに大量にあるなんて知らなかった」といったことが発見されるのだ。「島に存在していたリソースの循環」が起こるのである。その結果、プレイヤー同士の共創が始まり、島の「人の変容」が起こり、「新たな政策や事業」が立ち上がっていく。これら一連の活動は、長期的に見れば、さまざまな利害を超えて「島の願いを聴く」ことにもなっている。住民たちが生態系の循環を感じ、人間も生態系の一員であることを感じながら、島の「ありたい姿」を叶える行動をとっている、と考えられるのだ。



鼎談

私たちが自然とつながって はじめてウェルビーイングを実現できる

環境省のおおくらさん(大倉紀彰さん)／環境省 大臣官房 地域脱炭素政策調整担当 参事官 政策調整官、地球ココリ! 研究パートナーのひろしさん(山田 博さん)、海士町のけいすけさん(大野佳祐さん)の3人に聞き手/JRC 研究員・三田愛

環境省のおおくらさん(大倉紀彰さん)／環境省 大臣官房 地域脱炭素政策調整担当 参事官 政策調整官、地球ココリ! 研究パートナーのひろしさん(山田 博さん)、海士町のけいすけさん(大野佳祐さん)の3人に聞き手/JRC 研究員・三田愛

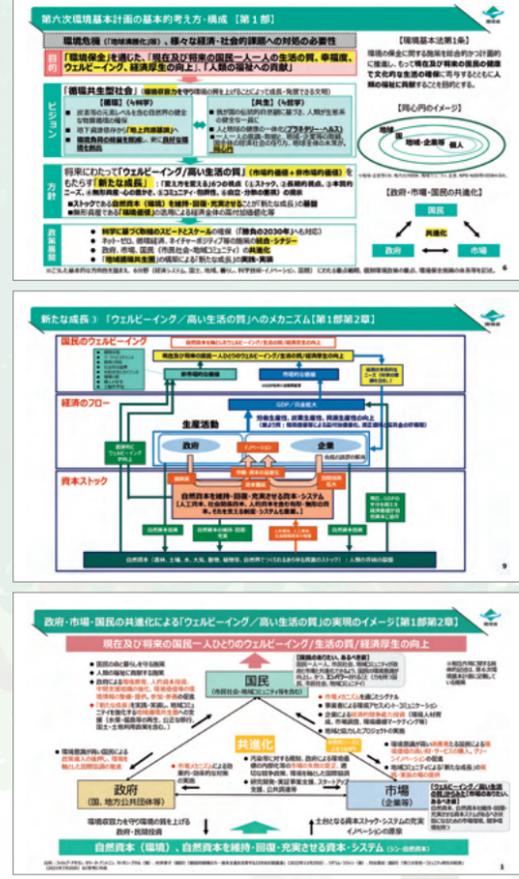
環境省のおおくらさんは、地球ココリ!の考え方や活動に早期から賛同してくれていました。なぜですか。おおくら 一言で言えば、地球ココリ!が、いまの日本社会に必要なことを最先端の手法で実践しているからです。2024年、日本政府は「第六次環境基本計画」を閣議決定しました(図6)。環境基本計画は、全環境分野を網羅する総元締め計画です。環境省の先輩方は、第一次計画から、経済社会システム、生活様式の変革を迫っていました。冒頭に「物質的豊かさの追求に重きを置くこれまでの考え方、大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会経済活動や生活様式は問い直されるべきである」という一文を掲げたのです。なぜなら、「規格大量生産型の工業社会が、人類文明の流れに沿わなくなつた」(2000年版経済白書)からです。



鼎談はオンラインで和やかに行われた。なお、おおくらさんは第六次環境基本計画策定の中心人物の1人

従来型の経済社会システムが経済の停滞や環境問題につながっているのです。では、私たちはどのような文明・経済社会のあり方を目指せばよいのでしょうか。第六次計画では、環境政策の最上位の目的に「ウェルビーイング」

図6 第六次環境基本計画



高い生活の質」を据えました。国民一人ひとりのウェルビーイング/高い生活の質を実現する文明・経済社会を目指すことを大目標に据えたわけです。そのためには、地上資源を基調とし、自然と共生する持続可能な経済社会システム「循環共生型社会」の実現が欠かせません。その実現には、



日本(地球)で暮らす皆さんの意識が変わる必要があります。特に、森林、土壌、水、大気、生物資源など、自然によって形成される資本「自然資本」が大事であり、自然資本を維持・回復・充実させることが「新たな成長」の基盤になることを理解してもらいたいと考えています。地球ココリ!は、まさに環境省が目

識や価値観「OSの変容」を、地域コミュニティのレベルで起こそうとしています。その点が画期的なのです。

今後の次世代資本主義システムは、「政府・市場・国民（市民社会・地域コミュニティ）の健全なトライアングル」が成立する必要があるとの指摘があります。三者が共進化し、健全に機能することが、循環共生型社会の実現の重要な土台になります。

今回の「ぐるぐる会議」は、そのうち、近年弱体化したと指摘されている地域コミュニティや市民社会に働きかける手法として最先端です。特に「島の願いを聴く」という考え方がすばらしいと感じています。

森で深い経験をすると人は自然に興味を持ち始める

——嬉しい言葉をかけてもらえました。ひろしさんはどう思いますか？

ひろし 全体的に、おおくらさんのお話のとおりだと思います。特にウエルビーイングには自然との共生が欠かせないという点に強く共感しました。

本題に入る前に自己紹介をします。私の職業はプロ・コーチです。コーチ、リーダー養成のトレーナーとしても長く働き、CTIジャパンの代表も



ひろしさん (山田 博さん)

務めました。一方で、20年ほど前から「森のワークショップ」や「森のリトリート」を開催し、多くの人を森にガイドして、森との対話を促してきました。

2024年からは武蔵野大学ウエルビーイング学部の教授として、大学教育の現場に初めて入りしました。自然との共生なしに、人間のウエルビーイングが成り立つことは難しいのではないかと考えています。この学部で自然や環境に深く触れる体験を創ることがウエルビーイングを学ぶ学生たちに必要ではないかと思つたからです。

入学したての1年生に「自然に興味がある人は？」と質問すると、手を挙げるのは1割くらいです。実は、大人でもやはり1割くらいです。おおくらさんの言うとおり、日本人は自然から離れ、その大切さを感じにくくなってしまっていると思います。

都会の人たちが、自然環境に関心がないのはイメージどおりでしょう。しかし、地域に自然に興味のある人が多いわけでもありません。

今回、私は海士町の皆さんと島の象徴的な山に登り、「里山里海の循環を感じるワーク」や「五感を開くワーク」を実施しました。それで感じたのは、自然豊かな海士町ですら、多くの人は島の自然を感じる力が弱まっているという印象でした。

私たちは「島の願いを聴く」というコンセプトを事前に用意していましたが、ワークの経験から、これを最初から前面に出すと、皆さんに届かないように感じました。そこで最後にわかってもらえばよい、というスタンスで進めることにしました。

——具体的にどう進めたのですか？

ひろし 「人の行動は知識が増えるだけでは変わらない」と思います。地球環境が大変な状況にあること、自然や生態系を守る必要があることをいくら学んでも、行動に移す人はめったにいません。むしろ危機を煽るだけでは逆効果で、かえって萎縮して行動が起これにくくなります。

行動変容を起こすには、「自然を感じる体験をしてもらう」ことが大切です。私は多くの人を森に連れていきました。森で心身の深い経験をすると、自然に興味を持ち始め、その結果、徐々に行動が変わる人は少なくありません。

今回もけいすけさんやゆういちろうさんは、ワークなどを通じていち早く変容していききました。この変容が「ぐるぐる会議」にポジティブな影響をもたらすきっかけになったと思います。

経済をスローダウンできるのが海士町の強みの1つ

——けいすけさん、2人の話を聞いてどう思いましたか？

「森のワークショップ」や「森のリトリート」を開催し、多くの人を森にガイドして、森との対話を促してきました。2024年からは武蔵野大学ウエルビーイング学部の教授として、大学教育の現場に初めて入りしました。自然との共生なしに、人間のウエルビーイングが成り立つことは難しいのではないかと考えています。この学部で自然や環境に深く触れる体験を創ることがウエルビーイングを学ぶ学生たちに必要ではないかと思つたからです。

「ぐるぐる会議」や私たちの活動を褒めてもらえるのは嬉しいことです。

幸いなことに、海士町は自然資本（自然環境）とコミュニティ（社会）が充実しています。この2つが充実している限りは、少なくとも飢えて死ぬことなく、海士町らしさを保ちながら生活できると感じています。

もちろん、まちの経済を良くすることは大切です。しかし、経済の充実を追い求めるあまり、自然資本とコミュニティを毀損しては本末転倒です。フランスに気をつける必要があります。

おおくら 本当にそのとおりです。第六次計画では、フロー（収入・支出）に加えて「ストック（貯蔵や貯蓄）の充実」が必須だと主張しています。ストックの充実が、国民の高い生活の質の実現に貢献するのです。

この場合のストックとは、まさに自然資本です。けいすけさんの言うとおり、私たちは豊かな自然資本の貯蓄があるからこそ、豊かな生活を送れるのです。自然資本を失ったら、元も子もないのです。しかし、そうした感覚を持っている人は決して多くありません。けいすけさんのように考える人を増や



けいすけさん (大野佳祐さん)

に魅力を感じてくれるのではないかと考えています。

人は自然そのものであることを体験的に学ぶ場がもっと必要だ

——自然資本を大切にすることを増やすにはどうしたらよいのでしょうか？

ひろし 「そもそも人は自然そのものであり、自然から与えられるもので生

きていること」「すべてのものがつながっていること」を体験的に学ぶ場をたくさん作るよと思っています。

たとえば、学生たちを授業で植樹活動に連れていき、森の保水力や治水力などをよく説明しながら植樹を体験してもらおうと、彼らは森が人間の命や生活を支えていることを体感的に理解します。こうした体験が大事なのです。

すことは喫緊の課題の1つです。**けいすけ** いま私の会社では、隠岐の木材を使って、自分たちで家を建設するビジネスを構想しています。昔の海士町には、木を切る人も、木材に加工する人も、建築する大工さんも十分にいました。ところが現在は、島外のプレカット工場で切り出された家のパーツを島に持ってきて組み立てる手法が主流になり、地元の木材加工工場は10年以上前に閉業しました。島の大工さんも少なくなりました。

日本の精神性を巡る旅

私たちはいま、「日本の精神性を巡る旅」の研究を進めている。テーマは日常の祈り。自然に生かされている感覚、食べものへの感謝、ものや道具への感謝。小さなものやディテールへのこだわり。人と神と自然が相互に関係しあひながら存在していること。海外の人たちに向けて、こうした日本人のあり方や精神性を感じてもらおう旅をコーディネートしているのだ。この旅では、ゲストと地域に気づきや変容をもたらすことを狙い、日本と自国の違いや今後の世界のあり方について、深い対話を交わす時間を設けている。この旅の経験は、帰国後も彼らの暮らしや仕事にポジティブな影響をもたらすことがわかってきている。さらに私たちは、日本人向けプログラムの用意も進めている。日本人が日本の精神性を取り戻すことも大切だからだ。いずれ成果を詳しく報告したい。



担当 研究員より

「私たち人間が、今、本当に力を発揮すべきことは、なんだろう？」

私は、「人間が、地球上のあらゆるいのちと共創するために大切なことはなんだろう？」と考えながら、地球コクリ!を続けてきた。あるとき、「自然は回り続けているのに、なぜ人間は経済を“回す”というのだろうか？」という友人の発言にハッとしました。人間以外のいのちがつながりあっているのに、人間だけがそこから外れてハーモニーに加わらず、地球や他のいのちに悪影響を及ぼしている。人間の本当のお役目はなんなのだろうか？

人間が「本領発揮」をするには、自分たちが地球の仲間だったことを思い出し、自然や地球とのつながりを取り戻して同期する必要がある。あらゆるいのちが仲間だと思えた時に、2次元と想っていた世界が、3次元、4次元と感ずるような次元の変化が起こる。

けいすけくんは、海辺での毎日の裸足ワークを経て、呼吸が深くなったという。昔はとにかく効率とコントロールを重視するタイプで、何か揉め事やトラブルがあると、すぐに火消していた。ところがいまは、「ジタバタしても風はおさまらないから」と言って、自分の力で無理になんとかしようとしなくなった。自然や地球とのつながりを取り戻し始めて、彼は大きく変わったのだ。このような「OSの変化」が、持続可能な地域を創る原動力となる。

「道」の世界や八百万の神に代表される日本の精神性には、これからの社会に大切な、深淵な価値観が眠っている。次の「日本の精神性を巡る旅」研究では、近代化で忘れられがちな宝物を再発見し、地球に向けて発信していきたい。



「コクリ!プロジェクト」創始者。人材育成・組織開発を専門とし、集合的ひらめきにより社会変容を起こす「コ・クリエーション(共創)」研究者。官公庁での各種委員を歴任。米国CTI認定コーチ。